

ブラジル特報



特集 独立200周年と統一選挙

- ・イピランガでの独立宣言から200年、アートの叫びとアウリベルデの行方
- ・ブラジル独立運動を醸成したカシャッサ
- ・現代ブラジル文学の新潮流を象徴する作家オスカル・ナカザト 独立200周年記念事業の一環として初来日

あの町この町
クイアバー Cuiabá



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

新規会員募集中!

詳しくは P21 をご覧ください。

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの町この町 クイアバー [小林雅彦]	3
ブラジル・ナウ 祝賀ムードなしの独立200周年と波乱含みの大統領選挙 [編集部]	5
【特集】独立200周年と統一選挙 イピランガでの独立宣言から200年、 アートの叫びとアウリベルデの行方 [仁尾帯刀]	6
【特集】独立200周年と統一選挙 ブラジル独立運動を醸成したカシャッサ [麻生雅人]	8
【特集】独立200周年と統一選挙 現代ブラジル文学の新潮流を象徴する作家オスカル・ナカザト 独立200周年記念事業の一環として初来日 [岸和田仁]	10
ブラジル現地報告 Make Your Life GOSTOSO ③ [REI CAPOEIRAP]	12
連載・日系企業シリーズ 南米一筋43年 株式会社アルファインテル [佐藤貞茂]	13
連載・ビジネス法務の肝 ブラジルにおけるプログラム医療機器(SaMD)に 関する法規制 [柏 健吾]	14
連載・勤どころ～税務&ホットトピック～ ブラジルにおけるインフラストラクチャーセクターの動向 [遠藤悦男/マウリッショ/三上智大/天野義仁]	15
エッセイ ルイス・フェルナンド・ベリッシモ氏との思い出 [沼田行雄]	16
ブラジルに暮らして Rolê ～流動的な、愛と笑いの集まり～ [尾曾菜穂子]	17
ジャーナリストの旅路 “未知の世界” ブラジルとの出会い [木村隆介]	17
連載・文化評論 サンパウロ・ブックフェアにみる ブラジル出版業界の復活パワー [岸和田仁]	18
キャンパス・コラム 情味溢れる情熱の地、ブラジル [橋元慈英]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ 独立200周年一バー事情	20
協会からのお知らせ	22



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「壁に描かれた巨大な顔。リオオリンピック開催時に再開された港湾エリア、その一角に世界5大陸の先住民族の顔が並ぶ。多様性を象徴するという。すっかり色が褪せても観光客はたえず、そのまなざしが語りかけてくるかのよう。」

永武ひかる：ブラジル撮影約30年。著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。
www.hikarunphoto.com

クイアバー Cuiabá

クイアバー市は、ブラジル中西部マト・グロッソ州(Estado do Mato Grosso)の州都だ。もともと17世紀に奥地探検隊(バンデイランテス)がコシボ川の終点に築いた集落が、クイアバーだ。集落は、その後衰退するが、18世紀に入るとコシボ川沿いのフォルキーリャで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが始まった。1719年4月8日正式にクイアバーが創設された。100年後の1818年9月17日、クイアバーは市に昇格し、1835年8月28日、当時のマト・グロッソ県(Provincia do Mato Grosso)の県都となった。その後、80年代から90年代にかけてマト・グロッソ州におけるアグロビジネスの進展を背景にクイアバーは急速に発展した。

現在、同市は、世界最大の湿原地帯である世界遺産パンタナール(Pantanal：クイアバーより南東約110km)及びギマランイス高原国立公園(Parque Nacional de Chapada dos Guimarães：クイアバーより北東約70km)等への経由地として観光業が発達している。クイアバー市の面積は、約5,000km²、人口は約62万人である(2021年 IBGE)。

1995年、サンパウロに勤務していた時、日本ブラジル修好100周年記念事業が全伯で盛大に行われた。日本から、清子内親王殿下がブラジルをご訪問になり、クイアバーご訪問の際の現地での準備にあたった。清子内親王殿下は、ダンテ・オリヴェイラ州知事はじめ、マト・グロッソ州官民から暖かい歓迎を受けられた。日系社会も、クイアバ日伯文化協会(Associação Nipo Brasileira de Cuiabá)など日系団体を中心に日系社会を挙げた歓迎を行った。今でも思い出すのは、殿下一行の歓迎式典会場(新築の日伯文化協会会館)にご到着時にこの地方特有の激しいスコールに見舞われたことだ。本当にバケツをひっくり返したとの表現がぴったりする大雨だった。スコールは間もなく収まり、歓迎式典は感動のうちに無事終了した。

殿下のご訪問に関し、もう一つ覚えているのは、ダンテ・デ・オリヴェイラ州知事と間近に接することができたことだ。当時、ダンテ・デ・オリヴェイラ知事といえば、軍政から民政への移管の際、国民的運動となった「今すぐ直接選挙を！(Diretas Já!)」の指導者の一人として全伯にその名を知られた政治家だった。この運動は、各政党が各党の枠を超えた協力を行うなどしたことで、1984年1月にサンパウロで行われた大集会で20万人以上を動員し、それ以降全伯に波及した。しかしながら、同年4月25日未明の下院議会において同人(当時は下院議員)提出の大統領直接選挙を可能にする憲法修正案は、僅差(可決まで22票足りなかった)で否決されてしまった。

オリヴェイラ州知事には、「今すぐ直接選挙を！(Diretas Já!)」運動の闘士という硬派のイメージを持っていたが、清子内親王殿下を優しくエスコートする姿が印象的だった。

小林雅彦(協会理事)



▲クイアバー中心部



▲ダンテ・デ・オリヴェイラ元州知事



SAUDADE DO BRASIL

43年間南米一筋!ブラジル専門の旅行会社(株)アルファインテル

ブラジルへの ご旅行・出張 は 創業 1979 年の アルファインテル に お任せください。

新型コロナウイルスの世界的な流行により、海外旅行に行くのは難しい状況が続いています。

海外旅行に対する考え方も変わり、より安心・安全が求められるようになりました。

コロナ禍でも、アルファインテルは南米系旅行会社で唯一のIATA(国際航空運送協会)公認代理店として、主に在留ブラジル人の皆様にブラジル行きの航空券を手配し続けている実績があります。

ご出発前に必要なPCR検査・陰性証明書の様式やワクチンパスポートなど、

各国の要件も最新情報にてご案内し、より安心・安全な旅をご提供します。

主要取扱航空会社：ルフトハンザドイツ航空、カタール航空、エミレーツ航空、エールフランス航空、KLMオランダ航空、
ラタム航空、アメリカン航空、ユナイテッド航空、デルタ航空、トルコ航空、イベリア航空、ゴル航空他

航空券のほか、現地のホテル、車両、ガイドの手配も実績ある弊社にご用命ください。

お客様のお声

2007年よりアルファインテルさんとブラジル音楽好きに特化したブラジルツアーを開催しています。なかでも2010年度のジョアン・ジルベルト&ルイス・ゴンザガの故郷訪問ツアーは思い出深いです。案内してくれた現地ブラジル人ガイドさんも「こんな所に来たの初めて!」と写真を撮りまくるほどでした(笑)。入手困難なイヴェッチ・サンガロのコンサートチケットを人数分確保していただいたことにも感謝しています。コロナが収束したらまた再開しましょう!引き続きよろしくお願いします!



Willie Whopper氏
(Barzinho Aparecidaオーナー)

ブラジルへ帰国する際は必ず利用させていただいています。乗り継ぎ便に間に合わないトラブルなど、いざという時にブラジル現地でも相談できるので、安心してブラジルへ行けます。また、ブラジル観光地のことを知り尽くしたスタッフが旅行プランを提案してくださるので、はじめての方でも失敗しない最高のブラジル旅行を楽しむことができます。



平野勇パウロ氏
(横アルデンーション
代表取締役)

僕が海外を旅するようになったのは25年くらい前。月日が経ち今は毎年のようにブラジルに行く生活になりました。治安状況の変化や新型コロナのような感染症が流行ったりしたとき、旅のアマチュアである僕らには知りようがない正確な現地情報や、危険を避けるノウハウが旅行会社にはあって、航空券をそこで買うということは、旅が終わり日本の土地を踏むまで見守ってもらっている、という安心感があることに気がつきました。旅の目的や希望実現のためのプランも一緒に考えてくれます。安心して旅の準備で実は一番大切なポイントですし、アルファインテルさんの細やかな対応や気遣いが本当に助かります。



宮澤摩周氏
(パーカッションスト・
Quer Swingar Vem Pra Cá代表)



観光庁長官登録旅行業 第1835号
東京都港区西新橋 1-20-10 西新橋エクセルビル 7 階
株式会社アルファインテル
電話：03-5473-0541
e-mail：info@alfainter.co.jp



Accredited
Agent

photo by Junko Sekine



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

祝賀ムードなしの独立200周年と 波乱含みの大統領選挙

北東部パライーバ州出身の超高学歴(パリ大学卒)インテリ画家ペドロ・アメリコ(1843-1905)がフィレンツェのアトリエで1888年に描き上げた大作「独立か死か」は、1895年に落成した「イピランガ博物館」(正式名は「パウリスタ博物館」)の入口正面ホールの壁に張り付けられている。縦4.15m、横7.6mという巨大絵画の大きさもさることながら、細密画の如く写實的に描き込まれた描写パワーに見る者は圧倒されてしまうが、騎馬隊に囲まれたペドロ皇太子が馬上でサーベルを突き上げて独立を叫ぶ、というドラマチックな構図はなんとも効果的だ。さすがブラジルの独立宣言だ、との印象を世界に広めた名画といえるからだ。後の歴史家たちが、この1822年9月7日の独立宣言という実際の歴史的事実はこの描写とは大いに異なることを実証したが、この名画の歴史社会的価値は変わらないといえるだろう。

レキシントンやコンコードでの英国軍との厳しい戦いを経て、1776年7月4日独立を宣言した米国に比し、ブラジルの場合は、「ポルトガルに戻るのをやめて、ブラジルに残る」ことにした皇太子の独立宣言を経てブラジル帝国という帝政国家になったのだが、何はともあれ、このペドロ・アメリコの名画がブラジル国民に“独立の意味を可視化”したことは間違いない。

そんな名画も制作されてから130年以上経過したため、あちこちの色が褪せたり画材の一部が破損したりと全体的な傷みが目立ってきていた。同様に、サンパウロ州立博物館の石造建築部分もあちこちが老朽化で傷んでいたことから、3年前の2019年10月、一旦休館として、この名画を含む歴史的遺産の修復・修繕が開始され、美術修復の専門家や建築学者らが科学的解析も行いながら、「イピランガ歴史遺産の再生」事業が進められてきた。(ちなみに修復予算は2億1千万レアルとのことだ)。

この改装・修復工事が完了して、リニューアルオープンとなるのが今年の9月7日、独立記念日である。これはサンパウロ州政府による独立200周年祝賀イベントの目玉であるが、並行して、MASP(サンパウロ美術館)では、特別展「Histórias Brasileiras」が開催(期間:8月26日—10月30日)され、ブラジルのHistórias(歴史+物語)を総括的に再考する文化イベントとなるとみられている。

ところで、今から100年前の1922年をいささか復習しておく、と、まず2月にサンパウロで「近代芸術週間」においてモデルニズモ宣言が行われたという“前奏曲”を経て、9

月には首都リオで独立100周年記念の国際エキスポが開催されるなど様々な祝賀イベントが連邦政府の主導で行われたのであった。では、100年後の今年の独立200周年に関しては、どんな祝賀イベントを連邦政府として予定しているのだろうか。現在(8月初め)、政府として発表されたイベントとしては、拡大版軍事パレードをブラジリアとリオで行う、というものだけだ。折角の独立200周年という機会なのに、祝賀ムードはまるでなしだ。何故なのだろうか。

それは、現政権が自国の独立200年の歴史を振り返る余裕も全くなければ基本的な歴史理念も持ち合わせておらず、1か月後の総選挙(大統領選挙)をなんとか乗り切る(いや、強引に「選挙不正」を捏造してでも大統領の地位を死守する)ことで必死だからだ、と解釈するしかない。

いうまでもなく今年2022年は、4年毎にやってくる統一選挙(大統領、州知事、下院議員全員、上院議員の約半数を選出)の年であり、選挙日程としては、10月2日(日)が一次投票日、10月30日(日)が決選投票日となっている。

この大統領選挙で、現大統領が再選される可能性は極めて低いというのが、数々の世論調査で明らかになっている。例えば、7月末の世論調査(ダタフォリャ)では、ルーラ候補(元大統領)への支持率(47%)がボルソナーロ候補(現大統領)への支持率(29%)よりも18ポイントも上回っており、この傾向が大きく変化する可能性はあまりないとみられている。

この劣勢を挽回するためには、まずは、現大統領を「偽情報と専制的ポピュリズム」と批判してきている司法(最高裁判所や選挙高等裁判所)を攻撃することに精力を傾けている。例えば、7月18日、ブラジリアに駐在している各国大使を大統領官邸に招き、ブラジルの電子投票システムの脆弱性を指摘し、2018年にハッカーが選挙高等裁判所(TSE)のコンピューターシステムに侵入したとされる件を理由に「2018年の選挙は不正選挙であり、2020年の地方選挙は実施されるべきではなかった」と、証拠も提示せず一方的に主張し、選挙高等裁判所(TSE)と連邦最高裁判所(STF)を批判した。

さらには、9月7日の独立記念日に最高裁への抗議デモを自分の支持者へ呼びかけ、大げさなポスターまで拡散中である。

三権分立の原則を自らぶち壊している現大統領のおかげでブラジルの国際的信誉度は低下してしまった。ブラジルの民主制が今後どうなるか、世界は注視している。

『ブラジル特報』編集部

イピランガでの独立宣言から200年、 アートの叫びとアウリベルデの行方



仁尾帯刀
(写真家)

「独立か死か (Independência ou morte.)」——ブラジルの歴史上最も重要かつ印象的であろうこの言葉は、今から200年前に当時摂政だったペドロ1世が、ブラジルの独立を決意して発した言葉だとされている。これと同名の絵画作品は、独立200周年に合わせて新装オープンされるイピランガ博物館の目玉作品だ。

『イピランガの叫び (O grito de Ipiranga)』の別名があるこの作品は、40人ほどの貴族と騎馬隊を従えた馬上のペドロ1世が、威風堂々と独立を宣言した様子を表している。同作は独立から半世紀以上を経た1886年にブラジル皇室から制作依頼を受けたブラジル人画家ペドロ・ア

だということとイメージの持ちうる力について考えさせられる。

独立200周年においては政府主催の市民参加型記念行事が少ないのが肩透かしだが、アートの世界では、ブラジルの歴史と現政権を批判するような展覧会が複数開催されている。

ユニバーサルな言語としての ブラジリアン・アート

サンパウロ近代美術館で開催中の第37回ブラジリアンアート・パノラマ展『灰の下に、灼熱 (Sob as cinzas, brasa)』は、過去の回と比較して、人種的、地域

的ダイバーシティの尊重を前面に押し出した内容となっている。世界的にダイバーシティの尊重が唱えられるなか、過去の軍事政権による抑圧を想起させる現政権下においては、LGBT含む性差別や人種間格差の改善、あるいは先住民保護の希

求が“叫び”にも似て声高だ。左派支持者が圧倒的に多いアーティストにはこれに同調し、創作を通じて政権への抵抗を促すものも少なくない。同展の展示作品を二つほど紹介しよう。

独立200周年をシニカルにオマージュした作品『独立と死 (Independência



▲ジャイメ・ラウリアーノ作「独立と死」(2022年)

e morte)』を出展したジャイメ・ラウリアーノは、主に黒人問題について社会に問うような作品を多数発表してきた。本作は先述の『独立か死か』の場所から王侯貴族一行が立ち去った後を描いた作品だ。画面中央に描かれた焼失した樹木と画面右側で水辺に流れ込む泥土は、現政権下で増加した森林伐採とダム決壊による環境破壊を示唆している。炭化した樹木の前に綴られた「牛が通れば、牛の群れが通る (passa boi passa boiada)」は、アマゾンでの違法伐採を助けた疑いで辞任させられたリカルド・サレス元環境大臣がバンデミック初期の閣僚会議で発した言葉からの引用だ。メディアの注目がCovid-19に集中している間がチャンスと、環境保護法の廃止、規制緩和や研究機関の解体など開発を促進させるための数々の企てを“牛の群れ”に例えて語ったものだ。説明を極力省いた作風は観るものを謎解きへと誘う。

北部ベレンで活動するエデル・オリベiraは、2014年開催の第31回サンパウロ・ピエンナーレで、半裸で拘束された被疑者複数人の巨大な肖像画を発表したことで全国的な知名度を得た。いずれも地元紙に掲載された写真を模写したもので、人物の眼に映る空虚さが印象深い。本展では17世紀初頭にポルトガル人が先住民を奴隷化したことに対してベレンの要塞への襲撃(トゥピナンバ族の暴動: 1617~1621年)を企てた族長グアイミアバについての自らの調査過程を描いた作品を展示した。作品内に自画像を加えることで過去の先住民リーダーに自らのアイデンティティを寄せた。

MASP(サンパウロ美術館)で7月末まで開催されていたルイス・セルビニの個展『歴史は決して同じにあらず (A mesma história nunca é a mesma)』は、独立200周年を記念して同館で8月下旬



から行われる大規模『ブラジルの歴史』展に先駆けて行われた関連イベントだ。セルビニは近年、MASPからの依頼を受けてブラジルの歴史的な出来事に関する大型の絵画作品を続けて制作してきた。いずれも痛ましい場面が描かれているが、内容とは裏腹の鮮やかで明るい色彩が戸惑いを感じさせる。

黄土色に輝いた水辺に山積みになった先住民の遺体と剣ナタを手にする男を描いた「アシムーの虐殺 (Massacre de Haximu)」は、1993年にロライマ州で起こった金の採掘者によるヤノマミ族の虐殺をテーマにしたものだ。ヤノマミ居留地は、今年、先住民保護区指定から30年を迎えたが、国土の開発を前進させる現政権下において同保護区での金の違法採掘は増え続け、森林伐採の規模は昨年過去最大に至り、水銀使用による河川の汚染やマラリアなどの疫病が広がっているという。違法に採掘される金は、ジュエリーブランドのみならず、貴金属精錬業者を通じてアップルやマイクロソフトなどのビッグテックとも取引されているという報道(出典1)があるゆえ、スマートフォンやPCを日々使用する誰も無縁ではない問題だ。

リオデジャネイロを拠点に活動するアドリアナ・ヴァレジョンは、ブラジルに根深いポルトガルによる植民地支配の負の遺産を訴える作品を多々発表してきた。8月1日まで約4ヶ月の間サンパウロ州ピナコテカで行われた大規模展『縫合、裂け目、廃墟 (Suturas, fissuras, ruínas)』では1980年代から現在までに制作さ



▲アドリアナ・ヴァレジョンの三部作「舌」(1998年)

◀ルイス・セルビニ作「アシムーの虐殺」(2020年)

れた約60点の作品が並んだ。

大航海時代からのポルトガルの覇権の名残は、現代でもその植民地支配の及んだ国や地域でアズレージョ(タイル)を多用したバロック様

式の教会建築などに見て取ることができる。ヴァレジョンの代表作の一つ『舌 (Língua)』は、伝統的な幾何学模様のアズレージョの装いの内に秘められた肉塊のごときグロテスクな立体物が露出している姿を表した作品だ。その様はポルトガルによる植民地支配で虐げられた人々の血肉を暗示するとともに、表と裏、平面と立体、秩序と混沌などの相対するものを端的に象徴している。

ヴァレジョンは、このアズレージョと肉塊の組み合わせを繰り返し作品化している。会場中央には、本展のために制作された2つを含む5つの立体作品が展示された。廃屋の断片を思わせる作品群は、ブラジルの日常生活にありふれた簡素なタイルで覆われており、それらにおいてもまた肉塊が内在していることに、植民地支配の痛みが今に至るまで根深く残っていることが表現されている。

先住民の土地問題、奴隷制に起因する黒人問題などブラジルが抱え続ける多くの根源的な問題は、1500年のブラジル「発見」以来の搾取の歴史に起因している。アート作品が国内の諸問題を取り上げて、その時々々の為政者に批判の矛先を向ける場合にも、その背景に西洋近代史とのつながりや世界の隅々にまで及んだ資本主義の影響が見て取れることが多い。この国の優れたアート表現が、地域的でありつつもユニバーサルな言語であるからこそグローバル化した世界に鋭く突き刺さるのだろう。

政治色の染み込んだ黄色と緑

さて、いよいよ来年元旦に発足する



政権が決まる大統領選が10月に行われる。ボルソナーロ大統領の支持率は昨年末より緩やかに伸びているものの、7月現在(出典2)においても未だ不支持率がそれを大きく上回っているため、対抗馬であるルーラ元大統領の当選が予想されており、政権は再び左派へと大きく舵を切ることになりそうだ。

前回の選挙キャンペーン期間からこれまでの約4年間で、国のシンボルカラーである黄色と緑の意味合いが大きく変わった。労働者党の象徴の赤に対して、ボルソナーロ陣営が黄色と緑を自らのシンボルに選んだからだ。以前はサッカーブラジル代表を応援する際に、支持政党にかかわらず誰も無邪気に身につけることができた鮮やかなアウリベルデ(黄色と緑)は、極右と称される軍部出身のボルソナーロの象徴となったのだった。ボルソナーロ支持者らが、ブラジル国民としての誇りとともに、黄色と緑で着飾って路上でのボルソナーロ応援集会に出かけるのに対して、労働者党支持者など反ボルソナーロ派は、黄色と緑を身につけることへの躊躇を余儀なくされた。それどころか国のシンボルカラーを奪われたと憤るものも少なくない。皮肉だがこの4年間、色彩によって最も強いイメージを構築したのはボルソナーロとその陣営だったのだ。

来年度からの政権の行方は気掛かりだが、政治的に二極化した時代において元来トロピカルな日差しの下で鮮やかに映えるアウリベルデからボルソナーロの色が消えるのか?あるいは染み付いたまま残るのか?についても大いに気になるところだ。

▲エデル・オリベira作「族長グアイミアバの肖像画のための研究」(2019年)

▲ペドロ・アメリ「作「独立か死か」(1888年)」

ブラジル独立運動を 醸成したカシャッサ



麻生雅人
(『メガブラジル』編集長)

カシャッサの誕生

「1822年、ドン・ペドロ1世がブラジル独立を祝うために乾杯したお酒はカシャッサだった」。

この“神話”は、カシャッサを愛国心やブラジリダージの象徴と見做す際に語られる有名な言い伝えのひとつだが、カシャッサには、独立やその先駆けとなったさまざまな運動と結び付けられた“神話”が数多く存在する。カシャッサがそのように見做されている理由を説明するには、まずはカシャッサの歴史を紐解く必要がある。

サトウキビの搾り汁から作られる蒸留酒カシャッサが誕生した時期と場所には諸説があるが、1516年から1532年の間にブラジルの海岸沿いにあるエンジェーニョ（サトウキビ生産から砂糖類や蒸留酒など加工品製造までを行う大規模施設）で誕生したと考えられている。ビスコ、テキーラ、ラムに先駆け、南北アメリカにおける最初の蒸留酒とされているこの飲み物は、歴史の舞台に登場して以来、この国の基幹産業のひとつであり続けているサトウキビ産業と共に発展していった。

誕生当初は家畜のエサや、肉体を酷使する奴隷労働従事者に与えられるために製造されていたといわれるカシャッサだったが、ポルトガル人が持ち込んだ蒸留技術により、支配者階層を含む幅広い市民が消費する飲料へと変化を遂げていく。

ワイン vs カシャッサ

しかし南米の植民地におけるカシャッサの需要の高まりは、ポルトガル王室にとって脅威となっていた。植民地に販売していた自国産のワインや、ブドウの

搾りかすから作られる蒸留酒バガセイラ（イタリアの蒸留酒グラッパのポルトガル版）の市場を脅かす存在となったからだ。

遂にポルトガルは、1635年から1639年にかけてバイーアにおけるカシャッサの販売、続いて製造を禁じた。しかし現実には禁止令は守られなかったばかりか、この品質の高い蒸留酒はアンゴラなどポルトガルの他の植民地にまで市場を拡大して、王室の経済を脅かしはじめた。奴隷貿易を通じアンゴラに届けられたカシャッサは地元の椰子酒より美味しく、ポルトガル産のワインより価格が安かったこともあり、支配階級層の晩餐のテーブルから民衆の祈祷所に至るまで幅広い場所で消費されるようになる。ポルトガルのワインはアフリカに届くころには酸化するなど劣化したのに対し、カシャッサは長い航海を経ても品質を保持できたことも市場獲得に有利に働いたという。カシャッサはアフリカ大陸では、奴隷を購入する通貨の代わりになるほどの価値を持っていた。こうした状況を受け、ドン・ジョアン4世は1649年9月13日に、カシャッサの製造を南米の植民地全土で禁じ、海外での商取引にも制限を設ける命令を発した。

独立運動とカシャッサ“神話” 「カシャッサの乱」

このような歴史が背景にあるため、独立運動やその先駆けとなった運動の逸話の中でカシャッサが反ポルトガル／ブラジリダージの象徴として語られるようになり、数々の“神話”が生まれた。

1788年～1789

年の「ミナスの陰謀」に関しては、「陰謀に関与した知識人、軍人、神父たちはカシャッサの杯を傾けながら計画を練った」、「1792年、首謀者とされたチラデンチスは絞首刑になる前に『故郷のカシャッサで我が喉を潤し給え』と言い残した」、など。

1817年の「ペルナンブーコ革命」に至っては、革命200周年が祝われた2017年に、「オ・グローボ」、「フォーリャ・デ・ペルナンブーコ」などいくつかのメディアが“神話”を堂々と報じていた。それは、革命家たちの愛国精神ゆえに、ヨーロッパ由来のさまざまな習慣が現地の習慣に置き換えられたというもので、「教会の聖体拝領のミサでワインの代わりにカシャッサが供され、ホスティア（聖体拝領パン）は小麦の代わりにマンジョッカで作られた」という逸話が、「神父の革命」とも呼ばれ聖職者が積極的に関与したこの革命らしい“神話”としてシンボリックに伝えられた（ちなみにこの革命の研究者として知られるペルナンブーコ・カトリック大学のフラヴィオ・カブラル教授は、聖餐に使うものが置き換えられたことを証明する資料は見つけないと指摘している）。



そして、数ある逸話の中でも、最もダイレクトにカシャッサがアイコン化されているのが1660年11月8日にリオデジャネイロで起こった蜂起だろう。反乱を起こした者たちがエンジェーニョ主たちだったこと、その主たる理由がカシャッサの製造禁止への抗議だったことから「カシャッサの乱」と呼ばれている事件だ。

17世紀後半には、オランダ領での砂糖生産の競合などで製糖産業が衰退しつつある中、カシャッサの需要増はブラジル各地のエンジェーニョを支える新たな産業となっていた。特に、バイーア、ペルナンブーコに次いでサトウキビ産業が盛んだったというリオデジャネイロのエンジェーニョでは、カシャッサ製造こそが主な収益源だった。これは土壌や気候も影響しており、リオで育つサトウキビから生産される砂糖は北東部の製品より劣っていた代わりに、むしろカシャッサ生産に向いていたのだ。それゆえ、1649年以降もリオデジャネイロでは、市議会が王室の方針にそむいてカシャッサの製造・販売・密輸を容認していた。しかし、1659年、サルバドール・コヘイア・デ・サー・イ・ベネヴィデスが3度目の総督に就任すると、市政府は態度を一変して王室の方針に沿ってカシャッサの製造・販売の禁止を打ち出した。議会で市政府とエンジェーニョ主たちと交渉が重ねられ、一時は禁止令が緩和される方向にまとまりかけたが、最終的には合意に至らなかった。

軍人としても名高いサルバドール・デ・サーがサンパウロでの任務のため不在だった時を狙い、エンジェーニョ主たちは1660年11月8日の蜂起で市議会を占領。サルバドール・デ・サーのいとこで代理知事を務めていたトメー・コヘイア・デ・アルヴァレンガを解任して、反乱軍による新政府を樹立した。

しかし翌1661年4月8日、サルバドール・デ・サーの軍はリオデジャネイロを奪還。反乱軍の関係者は捉えられ、首謀者ジェロニモ・バルバーリョ・ベゼーハは斬首刑となり首は街にさらされ、「カシャッサの乱」は1年足らずで鎮圧された。

だがこの事件もまた、“神話”的に語り継がれてきた物語のひとつだ。

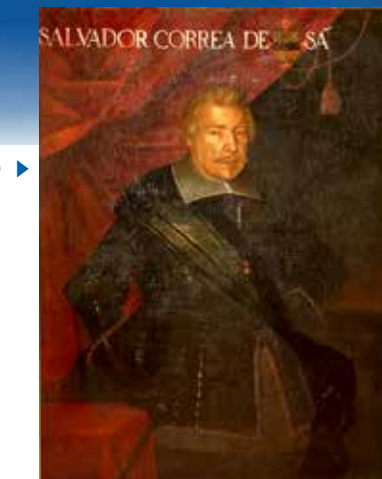
この騒乱は、一見するとカシャッサの製造・販売を禁止したポルトガル王室に対し、植民地のカシャッサ生産者が反旗を翻した革命のように見えるが、単純にはそう言い切れない面がある。そもそもこの蜂起後、反乱軍政府を樹立したエンジェーニョ主たちは、王室が運営する海外領諮問会議に対し、王への完全な忠誠を誓う宣言書を提出しているのだ。

エンジェーニョ主たちは、手紙の中で自分たちが王室の真の忠実な臣民であること主張。ファミリーは代々、何十年にもわたってリオデジャネイロの土地の管理や開発に携わり、奉仕してきたことを訴え、カシャッサの製造と販売の許しを願い出ている。と同時に、市の総督サルバドール・デ・サーの暴政や腐敗を非難している。

そもそもエンジェーニョ主たちがサルバドール・デ・サーに対し反旗を翻したのはこれが最初ではない。歴史を紐解くと、専制的に勢力を誇っていたサー家と、対抗するベゼーハ家の両家を軸に長年続けられていた抗争という側面が色濃くことが浮かび上がってくる。

1555年から約10年、グアナバラ湾地域を占領していたフランスを追出した後、グアナバラ湾西部（いわゆるリオデジャネイロ地区）で権力を持っていたのがサー家。湾の東部（サン・ゴンサロ・ド・アマランチ地区）で権力を持っていたのがベゼーハ家で、カシャッサを生産するエンジェーニョは東部に集中していた。

サルバドール・デ・サーは1637年にリオデジャネイロの総督の座に就くと、輸出品の倉庫管理など税金を得る特権を得て権力を増大させる。1642年にエンジェーニョ主たちは海外領諮問会議に対しサルバドール・デ・サーの暴政を訴えその座から引きずりおろし、ベゼーハ家のルイス・バルバーリョ・ベゼーハを知事に送り込んだ。しかし軍人サルバドール・デ・サーは、1647年に艦隊を率いてオランダに占拠されていたアンゴラとサントメ・プリンシペを奪還するなど王室に対し手柄を立て、1648年に再びリオデ



Salvador Correia de Sá e Benevides (著作権フリー) ▶

ジャネイロ総督に返り咲いた。アンゴラの総督も兼任していたサルバドール・デ・サーは、一時、親類のトメー・コヘイア・デ・アルヴァレンガをリオデジャネイロの総督にした時期もあったが、1659年、3度目の総督の座に戻り、そして「カシャッサの乱」が起こった。

結局、王室はエンジェーニョ主たちの訴えにも耳を傾け、サルバドール・デ・サーは更迭され、1661年、王室はカシャッサの生産は認めることとなった（販売も含め自由となるのは1695年のこと）。

9月13日＝カシャッサの日

そして現在では、王室によるカシャッサの禁止令を背景に、エンジェーニョ主たちが蜂起したという点のみが抽出して語れることで「カシャッサの乱」は“神話”化され、1661年にポルトガル王室がカシャッサの生産を認めたとされる日付（9月13日）は、今ではナショナル・カシャッサデーと定められている。

とはいえ、「カシャッサの乱」に至るまでサー家、ベゼーハ家はいずれも、ポルトガル王室の意向をそのまま受け入れていたわけではなく、王室とは距離を取りながら現地の都合に合わせた統治を行っていた。だから「カシャッサの乱」は、世襲制カピタニアを任されていた植民地のポルトガル人と本国のポルトガル人との間に存在した溝が、ブラジル独立に向かって深く大きくえぐれていく過程で起こるべくして起きた騒乱のひとつだったとも言える。建国200周年を迎える今年の9月13日には、ぜひブラジルという国が形作られていく中で、常に歴史に寄り添って存在してきたカシャッサに、杯を傾けながら想いを巡らせていただけたら幸いである。

現代ブラジル文学の新潮流を象徴する作家オスカル・ナカザト 独立200周年記念事業の一環として初来日

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

駐日ブラジル大使館の 独立200周年記念事業

ブラジル独立200周年記念の文化普及プロジェクトの一環として、駐日ブラジル大使館は海外文学翻訳出版で知られる水声社と提携してブラジル文学翻訳出版への助成金拠出を行っている。具体的には、水声社の「ブラジル現代文学コレクション」シリーズで2022年に刊行される、

- ① **グラシリアーノ・ハーモス**
『乾いた人びと』
- ② **オスカル・ナカザト**
『ニホンジン』
- ③ **リジア・ファグンデス・テレス**
『女の子たち』
- ④ **イタマル・ヴィエイラ・ジュニオール**
『まがった鋤』
- ⑤ **マルケス・レベロほか**
『ブラジル文学傑作短編集』

の5冊が対象となっている。念のため出版時期を記しておくと、①は2月、②は6月に出版されたが、③④⑤については、9月から11月にかけて出版される予定となっている。

この5冊の出版に合わせ、様々な関連イベントが企画され実施されている。まず5月にG・ハーモス『乾いた人びと』関連の映画上映会&シンポジウムが開催され、6月から7月にかけては、『ニホンジン』刊行記念イベントに参加するため著者のオスカル・ナカザト氏が招聘され来日した。こうした様々なイベントに筆者も依頼を受けて参加したが、ナカザト氏とは昼食会、刊行記念イベント会場でも長めの会話を交わすことが出来た上に、6月30日には1時間半ほどの独自インタビューも行ったので、事実関係を

中心として要約的なメモを重ねておきたい。

5月19日、アテネフランセにて

2月に刊行された『乾いた人びと』翻訳出版を記念した上映会&シンポジウム「20世紀ブラジル文学と映画」が5月19日、アテネフランセにて行われた。ハーモスの古典的作品（原著初版1938年）をネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督が映像化したのが、シネマノーヴォの幕開けを飾った名画『乾いた人生』（1963年）であったが、2001年の「ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督作品特集」を嚆矢として何回となく再上映されてきた。今回は原作の邦訳出版を記念しての上映会とシンポとなったものだが、シンポでは、名古屋外国語大学教授鈴木茂氏、上智大学講師タミス・シルベira氏と共に筆者もパネラーとして参加し、ハーモス文学やネルソン・ペレイラ監督について、さらにはノルデスチ（北東部）の干ばつ問題についても議論がなされた。

ナカザト氏の来日



6月26日（日）成田着、翌27日は、大使公邸での歓迎昼食会、大使館における『ニホンジン』刊行記念セレモニー、28日からは、茨城、東京、浜松、名古屋、金沢、神戸、京都を訪問、複数の大学（東京外国語大学、上智大学、愛知県立大学、金沢大学、京都外国語大学）での講演会、都内でのトークイベント、在日ブラジル人コミュニティ・ブラジル人学校との対話訪問など、二週間にわたって超過密スケジュールをこなした。

小説『ニホンジン』について

2011年に刊行され、2012年（芥川賞のブラジル版といえる）ジャプチ賞を受賞した『ニホンジン』のストーリーは、初期移民ヒデオ・イナバタのファミリーを巡って展開する。孫のノボルが語り手となって、農場におけるコロノ生活の半奴隷的実態がノンフィクションタッチで語られ、終戦直後のカチ組マケ組抗争（ヒデオはカチ組、息子はマケ組）も史実に則って語られていくが、最終章はノボルの日本行き（デカセギ）を示唆している。登場人物の心理描写もなかなか巧みな秀作といえる小説であり、ブラジル文学の歴史において初めての日系ブラジル人作家の出現と評価された作品だ。

ナカザト氏とのインタビュー

Q 作家、小説家、大学教授といくつもの肩書をお持ちだが、ご自身をどう自己規定するか。

A 短編や中長編の小説をいくつも書いているので、作家ないし小説家と呼ばれることも多いが、自分としては、まず大学教師（註：現在、パラナ連邦工科大学教授として文学と言語学を講じている）だと考えている。比較文学・文学理論で修士号、ブラジル文学で博士号を取得したが、学生を相手に教えることが好きなので、根っからの教員だ。従って、自己規定するとすれば、「小説を書くこともある大学教員」となる。

Q 大学院（博士課程）で20世紀ブラジル文学をリサーチした成果が博士論文となったが、その時の「落胆」が小説『ニホンジン』を書こうとのモチベーションに繋がったと聞いたが。

A パウリスタ州立大学 (UNESP) に提出した博士論文は、『統合と二重性のイメージ---フィクションにおけるニボ・ブラジル人の登場人物』である。これは、ブラジル文学作品のなかでドイツ移民やイタリア移民が取り上げられたり中心テーマになっている場合も少なくないのに、脇役であれ日系移民が登場するブラジル文学作品は極めて少なく、ほぼ無視されているといえるというのが私の結論であった。例えば、モデルニズモ宣言といえる『食人宣言』を書き上げたオズワルド・デ・アンドラーデの小説『ゼロ地点』では、「日本の帝国主義がこの黄色いチビでずんぐりした陰険な連中の心を律していた」という一節くらいで、今風にいえば人種差別的な記述だ。

Q 『ニホンジン』の続編、『ニホンジン2』を書く予定は？

A 映画でも小説でも、ヒットすると、続編「その2」を書いたり制作したりするものだが、ほぼ間違いなく「その2」は、駄作となるものが多い。故に、『ニホンジン2』を書くつもりは全くない。初期の日系ブラジル移民の苦闘の日々を映像化した、チズカ・ヤマザキ監督の『GAIJIN』（1980年）は素晴らしい映画で私も見て感動したが、その続編である『GAIJIN2』（2005年）は、ただけな。日本へのデカセギ日系ブラジル人を描いたものだが、何というか、映像化の視点が定まっておらず、ストーリー展開

も不完全というか、途中で見るのをやめてしまったほどの「出来栄」であった。この『GAIJIN2』は「失敗作」といえる。

実は、現在執筆中の小説は、なんとか今年中に刊行したいと思っているが、そのタイトルは決めている。『オジイちゃん』が、そのタイトルだが、別に日系人が主人公ではなく、ポルトガル系ファミリーを舞台にしており、息子の一人が、学生運動から武装ゲリラ運動に参加していく、という1960年代70年代の軍政時代のブラジルが背景だ。これ以上のストーリー紹介は「ヒミツ」としておきたい。

Q 今回の訪日の機会を利用して、日本を舞台にした小説も構想中と聞いたが。

A 現在、20万人を超える在日ブラジル人が日本で働き生活しており、その中には私の親戚も知人も少なくない。その実態の一部を今回の各地訪問で実感したこともあり、改めて、日本を舞台とした小説を構想したいと思っている。但し、『ニホンジン』の続編では全くないものとなるだろう。

Q パラナ社会について聞きたい。今年2月のロシアによるウクライナ侵攻が始まった時、3月初めにパラナ州議会が、特別会議を招集し、「ウクライナへの、全面的かつ無制限の連帯」を全会一致で決議した。これは、ブラジルで60万人といわれているウクライナ系住民の8割くらいが集中しているのがパラナ州であるからだ。この一例からもわかるが、パラナは欧州各国や日本などからの移民が開拓して築き上げた社会であり、先住インディオ、イペリア（ポルトガル）、アフリカという三つの文化の融合がブラジル社会のベースとなっているという定説とは異なる。

そんなパラナ社会論としては古典（初版1955年）といえるウイリソン・マルチンスの『ある異形のブラジル (Um Brasil Diferente)』の最終ページの結語部分を読むと、「パラナとは何か。社会学的な視点からいえば、他のすべての諸文明の破片群を合わせて築き上げたオリジナル文明という新次元を、ブラジルに付加した地域である。（中略）人的規定からすればブラジルのではないともいえるだろう。大仰な身振りや感情の爆発に敵対しつつ、その歴史は、謙虚かつ堅固に、

その奥深いところでは全くブラジルの歴史を築き上げた。それは、多くの対立文化に対抗しつつもナショナルな思念を植えつけることが出来た、という意味でのブラジルの歴史だ。州民文化のルーツであるヨーロッパ本体でも出来なかった人間同士の友愛という模範を示し、それぞれ違った諸文化を調和的にまとめるという素晴らしい経験を具現化できたのであった。これが、パラナである。」

こうした見方については、パラナ州民のナカザト氏はどう考えるか。

A パラナ州は、確かに、イタリア、ドイツ、オランダ、ポーランド、ウクライナ、スペイン、レバノン・シリア、日本などからの移民たちが作り上げた州であり、それぞれの移民がもたらした諸文明が融合して一つのオリジナル文明を築き上げたといえる。世代交代でブラジルに同化してゆき、イタリア移民の場合は、イタリア系ブラジル人となり、日系人の場合は、日本人からニボ・ブラジル人になった。実は、ウイリソンの著書は、まだ読んでいないのだが。

Q 私が以前読んで感銘した小説の一つが、ミゲル・サンシエス・ネトーの『アナキストのある愛 (Um Amor Anarquista)』（刊行2005年）だ。これは19世紀末パラナ州バルメイラでイタリア人アナキストたちが立ち上げた実験村「コロニア・セシリア」を舞台とした歴史小説で、刊行された当時「新しいブラジル文学潮流」と玄人筋から高い評価を受けた。パラナに入り込んだ移民たちの物語をベースとした歴史フィクション文学として捉えれば、この作品も『ニホンジン』も、どちらも「新しいパラナ文学潮流」といえるのではないか。

A 確かに、ご指摘の通りで、一つのパラナ文学潮流といえるかもしれない。コロニア・セシリアの話は比較的知られているが、パラナ州には、様々な移民による、様々な歴史経験が行われたところであり、そうした人々の社会活動があれば、それらを題材とした「パラナ文学」が今後も展開していくと思う。サンシエス氏は、貧しい農家出身で、奨学金のおかげで大学に入り、さらには博士号も修得している。彼は作家であると同時に大学教員で、現在はボンタグロッサ州立大学の学長になっている。

Make Your Life GOSTOSO ③



REI CAPOEIRAP
(音楽プロデューサー)

真夏の日本から真冬のブラジルへ

ブラジル・サンパウロで7月に行われる世界最大級の日本祭り、Festival do Japão に出演するため、急遽ブラジル行きが決定した。4月に帰ってきたばかりだったが、6月末から再びサンパウロに飛んだ。緩和してきたコロナ規制と夏のハイシーズン。また航空会社の燃油サーチャージの大幅引き上げに伴い、インターネット検索での航空券は高騰。南米旅行を専門に扱うアルファインテルさんに航空券の手配をお願いし、日々変わる渡航情報に関しても色々教えていただき助かった。ワクチン接種証明書があれば日本出発時に必要だったPCR検査が6月末には不要だったので今回は出発前のバタバタが皆無だった。

ありがたき酷評

サンパウロに到着して間もなく、時差ボケもまだ激しい中、現地のとある日本人の方と対談させていただいた。その方から自分の音楽について歯に衣を着せぬ何とも厳しい評価をいただいた。

『ブラジルのファンキと盆踊りの融合、って違和感しかなかった。』三味線や太鼓など、日本の伝統音楽を一生懸命練習しているブラジル人たちを茶化している、とまで云われた。正直ショックだった。これからサンパウロの舞台でやるというのに、不安になって云われた言葉を一週間ぐらい引きずってしまった。冬のサンパウロがさらに寒く感じた。

アウグスタ通りのすき家で Kara-Ague Don Com Queijo (唐揚げミラネーザ丼) を食べながら、ああ、あの方はきっと所謂メインストリームを好む方なんだろう。面と向かって云っていただいた言葉、胸に受け止め、気持ちを引き締めることができた。Kara-Ague Don が旨かった。

フュージョン寿司のように

世界でウケているフュージョン寿司のように既存概念をブッ壊す音楽を自分は意図して作っている。自分自身、正統派ではないことはわかっているし、ブラジル音楽でもあり日本音楽でもある新しい場所を模索して探している。正真正銘、新鮮な素材を生かした日本の美味しいお寿司は最高だろう。その味が一番だと信じていたら、恐らくブラジリアン寿司はおろかカリフォルニア寿司も食べられないだろう。敢えて食べる必要す無いのだろう。かく云う自分も Hot Roll (ホットロール) は苦手だが、6年前にスペイン・イビサ島でイタリア発祥のブラジリアン寿司をサケリーニャを飲みながら食べたのが衝撃でそれ以来、ヨーロッパやブラジルはサンパウロやリオ、バイアア各地で“フュージョン寿司”を好んで食べてきた。

2年前に作った“Tankobushi Funk 炭坑節ファンキ”も“Baile de Tokyo”も自分はこだわりを持って自分だけのスタイルの音楽を作っているという自負がある。だから、ここで折れてはいけけないのだ。伝統と革新。伝統を尊重し、継承しながら新しいものを創り出したい。フュージョン、それが自分のモットーだから。

Festival do Japão での出会いと感動

日系ブラジル人の皆さんに失礼のないようにしよう、同時に日本



Oi! Japão! 日本人、聞こえますか?



人の自分がどれだけこの国ブラジルを想っているか愛を伝えよう、そして自分が今出来る最大限のカッコいいパフォーマンスを見せようと心に誓った。

リオデジャネイロのイタグアイから5人の若手ダンサーたちを呼び、ブラジルと日本の国歌を弾くための電子ピアノも準備した。迎えた Festival do Japão 初日当日。若干の緊張はあったもののうまくいった。感謝のおもてなしライブが出来た。新しい出逢いも沢山あった。3日でおよそ18万2千人の来場者を記録した今回の日本祭りはコロナの影響で2年の間、リアル開催できずにいた。そのため出展者や来場者の皆さんもとても嬉しそうに見えた。アニメ・コスプレ人気の他の海外でも行われている日本祭りとは一味も二味も違うブラジルの日本祭り。言うまでもなく、日本人ブラジル移民の歴史がそこにあるからなのだ。新しい感動があった。“俺のブラジリアン JAPORTUGUÊS” YouTube チャンネルで色々和インタビューをしてきたので、是非その様子を観ていただきたい。

Abrigatô

声をかけてくれる、応援してくださる方々がいる。とてもありがたいことだ。Festival do Japão でのきっかけをくれた JOE HIRATA さん(外国人で初めてNHKのど自慢大会で優勝したブラジルで活躍する歌手)、Alternativa の皆さん、日本海外協会の皆さん、その他大変懇意にしてくれたブラジルの皆さんに感謝しかない。ありがとうブラジル! だから、負けない、結果を出していく。Só Gratidão,Vou Me Ganbatar!Bora! ブラジルと日本をもっとフュージョンしていきたい。

ああ、イイ気分だ! ≡ Ai Que Bunda! (何てケツだ!)

ブラジルでポルトガル語に触れた方なら誰でも思いつくような、この日本語とポルトガル語のシャレ。これを小咄で終わらせるのではなく、音楽作品というカタチにするため制作した、といっても過言ではない楽曲『Bum Bum Bom Bom (ブンブンボンボン)』。2月にリオデジャネイロで撮影したミュージックビデオを7月のブラジル滞在中にリリースする予定だったのが“ブラジルあるある”で大幅に遅れ、幾度の交渉と確認を繰り返し、KondZilla チャンネルで8月末のリリースとなった。

前述の Festival do Japão、そして帰国翌日に参加した NPO 法人ブラジル solidário 横浜の114周年イベントや、8月上旬に名古屋で行われたブラジル人主催の音楽フェスティバル Summer Fest Japan でも好反応を得た。日本人がサンバをやるのがファンキをやるのが、制限は無い。しかしながら Gringo の自分は今後も起源と歴史を尊重しながら、あくまで日本人の品格と教養はしっかり持ってブラジルに挑戦していきたいと思う。



南米一筋43年 株式会社アルファインテル

1979 年創業

私は東京農業大学在学中に、移住研究部という部活動で移住に関する研究に関わったことをきっかけに、1974年に海外移住事業団(現在のJICA)の派遣で1年間ブラジルでの研修の機会を得た。サンパウロからブラジリア乗り換えて3日間かけてバスでブラジル北部の研修先へ向かった。ベレン、トメアス、モンテアレグレ、マナウスで日本から移住した方々のもとで研修をし、酷暑の中でのご苦労をつぶさに感じた。

この研修でできたブラジルとの縁で1979年に起業して以来、中南米、特にブラジルを主に取り扱う旅行会社として営業している。

当時ブラジルから各県人会の訪日団やコチア青年の2世訪日研修団を代表とする団体が多く日本を訪れてくれた。1979年の12月にコチア青年移民(農業移民)の移住25周年の記念事業として、「第1回コチア青年2世訪日研修団」130名の移民2世の子たちが日本に到着したときのことはよく覚えている。1986年にはブラジルに現地法人を設立(現在は別会社)し、私は10年ほどサンパウロに駐在し、ブラジルと日本を行き来した。

入管法の改正

1990年6月の入管法の改正実施により、日系2世、3世やその家族の就労が合法化され、ブラジルから来日する労働者が急増することになる。当然弊社はこの来日航空券の販売に力を入れた。1989年に14,528人であった在留ブラジル国籍者の数が、1996年には20万人を超えたのだ。今思うと、この時にこのマーケットに参入したことが弊社にとって大きかった。1991年には名古屋支店を、1994年には群馬支店を開設し、エスニックマーケットと言われるこの市場を拡大していった。その後は日本に定着した在留資格を持つブラジル人、また帰化した方々のブラジルはじめ南米への帰省のための航空券の販売が弊社事業の7割以上を占めるようになった。

一方で、弊社ではアウトバウンドでもブラジルをメインに団体から個人旅行まで幅広く取り扱っている。ブラジルへの移民80周年や100周年のときには、各県からブラジルへ慶祝団が派遣された。文化・芸能団体も派遣され、移民された方々のご苦労に謝意を示した。

2006年には第一種旅行業資格を取得し、自社で募集型の海外企画旅行を実施することも可能になった。

IATA 公認代理店へ

更に弊社にとって大きな転換点となったのが、2012年10



佐藤貞茂
(株式会社アルファインテル 代表取締役)

月にIATA公認代理店の資格を取得したことだ。IATAとは国際航空運送協会(International Air Transport Association)という国際線を運航する航空会社、旅行代理店、その他の関連業界のための国際的な業界団体のことだ。IATAの公認代理店になるには、一定の基準の審査をし、認可されなければならない。日本国内には旅行会社が1万社以上あるが、IATA公認代理店はそのうちの250社程度だ。最大のメリットは世界各国のIATA加盟航空会社の航空券を自社で発券ができることだ。これにより弊社は航空会社と直接契約をし、世界中の航空券を自社で発券し、さらにエスニックマーケットにおいては特別な料金で発券・販売することが可能となった。

2016年1月には、社名をそれまでの株式会社アルファインテル南米交流から、その守備範囲を広げるべく株式会社アルファインテルと変更した。

その流れでブラジル人よりも在留者の多いフィリピン人のマーケットにも参入し、2016年2月にはフィリピンのマニラにコールセンターを開設した。

私ども旅行業の仕事は、上記のとおり人の動きがあってはじめて成り立つものだ。

コロナ禍

2020年3月、新型コロナウイルスの感染拡大により人の動きは止まり、以降旅行業界は文字通り凍り付いてしまった。各国の入国制限等により、2020年4月以降予定していたツアーは全てがキャンセルとなった。

しかしながら、コロナ禍の中でも、最も早く人の動きが戻り、活発だと言えるのが、在留外国人とりわけブラジル国籍の人たちだった。あまり理解されていないかも知れないが、日本に在留資格のあるブラジル人は、コロナ禍でも自由に(コロナの水際対策のため検査など煩雑な手続きはあるが)日本とブラジルを行き来することは可能だったのだ。更に言うと、ブラジルだけは日本人に対して一度も国境を閉じていないので、実は日本人も自由にブラジルには旅行ができた。

もちろん、日本人の海外旅行はまだまだ見通しが立たないので厳しい状況であることには違いないが、1990年にエスニックマーケットに参入したことが、今になって弊社にとっては非常に大きなことであったし、これがなければコロナ禍を生き抜くことは難しかったかも知れない。

今後しばらくはwithコロナ時代が続くであろうが、経口抗ウイルス薬ができるなどして、人の動きが戻り、また日本の皆さんがブラジルへ多く足を運んでくれる日が一日も早く訪れることを願ってやまない。



トメアスの開拓戦没者慰霊碑を訪れた際

ブラジルにおける プログラム医療機器(SaMD) に関する法規制



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

1. プログラム医療機器の発展と ブラジルの法規制

近年、医療行為においてもデジタル技術の活用が進んでいる。診断や治療を支援するソフトウェアはプログラム医療機器 (Software as a Medical Device : SaMD) と呼ばれ、たとえば、人工知能 (AI) による画像診断やニコチン依存症に対する治療用アプリなど多数のプログラム医療機器が実際に活用されている。プログラム医療機器に関しては、各国でその開発や実用化のための制度が制定され、日本でも、2020 年に厚生労働省がプログラム医療機器実用化促進パッケージ戦略 (DASH for SaMD) を打ち出すなどプログラム医療機器の実用化に向け国を挙げて体制強化を図っている。

ブラジルにおいては、プログラム医療機器に特化した具体的な法規制はなく、プログラム医療機器についても、国家衛生監督庁 (Agencia Nacional de Vigilância Sanitária : ANVISA) が制定した医療機器全般に関する規則 (2001 年 RDC 決議 185 号 (以下「決議 185 号」という) など) が適用されていた。もっとも、従前の ANVISA の決議はハードウェアタイプの医療機器を想定した規定であったため、ラベル表示や使用説明書の印刷などプログラム医療機器ではその対応が想定できないものも少なくなかった。また、ソフトウェアのアップデートのたびに ANVISA への変更申請が必要か否かなど不明瞭な点が少なくなかった。そのため、プログラム医療機器を利用した医療行為の法的安定性がなく、その結果としてプログラム医療機器の実用化が遅れていた。そのような状況において、ANVISA は、2022 年 3 月に RDC 決議 657 号 (以下「決議 657 号」という) を発行し、プログラム医療機器の特殊性に応じた新たなルールを制定した。

2. プログラム医療機器の定義

決議 657 号では、プログラム医療機器を、1 つ以上の医療用途を有する医療機器 (体外診断用薬・機器 (In Vitro diagnostics) を含む) で、モバイルアプリケーションの形態を含み、ハードウェア医療機器の一部ではないものと定義している。なお、「医療機器」とは、決議 185 号において、薬理的、免疫学的又は代謝学的手段を用いずに (これらの手段により機能が補助される可能性はある)、予防、診断、治療、リハビリテーション又は避妊を目的とし、人に主要な機能を発揮させるものと定義されている。そのため、運動などの健康活動の奨励や健康管理の維持を目的とし、予防、診断、治療、リハビリテーション又は避妊を目的としない

ソフトウェアはこれに含まれない。また、ANVISA により規制対象外製品として指定されているソフトウェア、医療サービスの事務管理のためだけに使用されるソフトウェア、臨床診断や治療目的のない人口動態や疫学の医療データを処理するソフトウェア及びすでに ANVISA の規制を受けているソフトウェアもこれに含まれない。

3. プログラム医療機器の届出・登録

プログラム医療機器をブラジルにおいて製造、輸入及び販売するためには、決議 185 号に基づくリスククラス (I、II、III、IV) に応じて、ANVISA への届出又は登録が必要となる。どのリスククラスに該当するか疑義がある場合には、ANVISA に確認することができる。ただし、医療機関自身により開発され、当該医療機関又はその子会社における医療サービスのためにのみ使用されるプログラム医療機器は、リスククラス I 又は II に分類される場合、ANVISA への届出又は登録が必要とされるその他の医療機器の機能を妨げない限り、ANVISA への届出は不要である。なお、特定の医療機器の専用付属品であるソフトウェア及びプロセッサを搭載した特定のハードウェアに組み込むことを前提に開発されたソフトウェアは、かかる特定の機器 (ハードウェア) とともに ANVISA に届出又は登録が必要となる。

4. その他の新たな規制

決議 657 号によるその他の規制の詳細は割愛するが、決議 657 号はいくつか新たな規制を設けている。たとえば、決議 185 号などにおいて規定されているラベル表示や使用説明書に関してプログラム医療機器の特殊性に応じた追加的な記載事項 (ソフトウェアの更新方法の説明など) が規定される一方、ソフトウェアがオンライン上で配布されている場合は物理的なラベル表示や使用説明書の配布は免除されることが明記された。また、医療機器に関する情報の変更は 2020 年 RDC 決議 340 号に従う必要があるが、決議 657 号においてプログラム医療機器について変更申請が必要となる事由 (新たな適応症の創出など) が規定された一方、単なるプログラミングのエラー修正などは変更の必要がないことが規定された。さらに、医療機器の安全性及び効能に関する基本要件を規定した 2021 年 RDC 決議 546 号がプログラム医療機器にも適用されることが規定されるとともに、プログラム医療機器の特殊性に応じた項目 (ソフトウェアと使用環境の相互作用により生じ得るリスクに関する情報提供など) が規定された。

ブラジルにおける インフラストラクチャーセクター の動向



遠藤悦男マウリッショ
(KPMG ブラジル
アドバイザー
パートナー)



三上智大
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)



天野義仁
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
責任者)

ブラジルは、国土面積 851 万 km²、人口 2 億 1300 万人超、26 州、連邦区 (ブラジリア)、5,570 の自治体に分布する大陸規模の国であり、内陸部の各所で生産、都市部への輸送、沿岸部の港への輸出のために多くのインフラが必要である。しかしながら直近 10 年は、ブラジルにおいて公共予算が限られていることもあり、インフラへの投資が年々減少している。ブラジルインフラ・基幹工業協会 (ABDIB) によると、2021 年にはエネルギー、運輸、通信、サニテーションの各分野に 1,480 億リアル (GDP の 1.7% に相当) が投資されたに過ぎない。全国的にインフラの拡大と質の向上を図り、ブラジルコストを削減するためには、更なる投資が必要である。

1995 年にコンセッション法 (法令 8,987/1995) が可決されて以来、連邦政府及び州政府は、公的補助金を用いないコンセッションに依存し、民間投資によるインフラ拡張を進めてきた。その後、インフラ投資全体に占める民間企業の割合は年々増加し、2010 年には 56%、2021 年には 78% に達している。2004 年には PPP - Public Private Partnership (法令 11,079/2004) が可決され、政府による補助金付きコンセッションを行うことが可能になった。PPP は、社会インフラ (高速道路、地下鉄、BRT、モノレールなどのモビリティ、セキュリティ、病院、公共照明、市民サービスセンター、スポーツ施設など) の分野で民間資本を呼び込むために、政府がコンセッション事業者に補助金を支払って事業者の運営費を軽減し、結果として社会インフラに係る料金の値上げを抑制する効果がある。あるいは利用者から徴収できないサービス (例：刑務所、公立病院等) について政府がコンセッション事業者に運営費を全額補助することもある。

2016 年、連邦政府は PPI - Investment Partnerships Program を制定し、PPI は連邦政府及び州政府のコンセッション及び PPP プロジェクトの選定、優先順位付け、ストラクチャリングに関する公共部門のガバナンスとプロセスマネジメントを担当する公的組織となった。以来、連邦政府は PPI を通じて、契約の質を向上させ、様々な分野におけるコンセッション及び PPP プロジェクトのストラクチャリングとオークションの件数を大幅に増加させることに成功した。

2019 年から 2022 年 4 月までに、PPI は 147 件のプロジェクトオークションを成功裏に支援することができ、総額 1,690 億米ドルの投資と 300 億米ドルの政府による補助金が発生した。通常オークションで使用する競争基準は、入札金額が最も高いものであるが、PPP の場合は、政府がコンセッション事業者に支払うべき補助金の水準が最も低いものが使用される。投資の内訳は、石油及びガス部門で 1,250 億米ドル、運輸部門

(空港、高速道路、鉄道、港湾) で 170 億米ドル、社会インフラで 100 億米ドル、エネルギー部門 (送電・配電) で 80 億米ドル、通信部門 (5G ライセンス) で 80 億米ドルとなっている。

直近のインフラ動向

ブラジルで多くの投資を必要とする分野としてサニテーションがある。現在、飲料水の供給のカバー率はブラジル総人口の約 84%、衛生的な下水処理のカバー率はブラジル総人口の 56% にとどまっている。2020 年に可決されたサニテーションに関する新たなフレームワーク (法令 14,026/2020) では、2033 年までにブラジル総人口の 99% に飲料水を、ブラジル総人口の 90% をカバーする汚水の収集と処理を行うという、国全体のサニテーションの普遍化に関する明確な目標が設定された。2020 年に KPMG Brazil では、ブラジル全体のサニテーションの普遍化に必要な総投資額を 7,530 億リアルと推定する調査を実施した。新たなフレームワークが可決されて以来、6 つの州 (アラゴアス州、マットグロッソ・ド・スル州、エスピリトサント州、リオデジャネイロ州、アマパー州、セアラ州) でサニテーションサービスのコンセッションと PPP 契約の入札が相次いで成功している。当該 6 州では、入札で確約された投資総額は 470 億リアル、政府による補助金は 300 億リアルに上り、落札グループの多くには国内外の関連年金やインフラ基金が含まれている。これらのオークションは、ブラジルで採用されたこのサニテーション普及モデルへの関心と市場の潜在力を証明するものとなっている。

現在、PPI は、総額約 410 億米ドルの投資案件を組成中であり (内訳：社会インフラ 24 件、空港 17 件、港湾 14 件、国営企業民営化 6 件、高速道路 5 件、鉄道 3 件、送電 2 件、石油・ガス 1 件)、2022 年後半から数年の間に入札が行われる予定である。

サニテーション分野では、過去 2 年間のコンセッションや PPP の入札で 470 億リアルを保証したことを考慮しても、2033 年までにブラジル全体のサニテーションの普遍化のために更に 7,000 億リアル以上を投資する必要がある。

2022 年 10 月には大統領選挙と知事選挙が行われ、2023 年 1 月からは新知事が 2023 年から 2026 年までの任期中に、運輸、エネルギー、都市交通、衛生、社会インフラの分野で多くのコンセッションと PPP プロジェクトを含む、現行と同じくらい野心的なインフラ投資計画を開始しなければならないであろう。

ルイス・フェルナンド・ベリッシモ氏 との思い出

沼田行雄（協会理事）



ルイス・フェルナンド・ベリッシモ氏は、1936年9月26日、RS州ポルトアレグレに生まれ、今年85歳を迎える。長年にわたって、作家として、ジャーナリストとして、そして、ジャズ・ミュージシャンとして、多彩な活動を続けており、作家としては、クロニカと呼ばれる短編小説分野で多く活動され、特に、1981年出版の「O Analista de Bagé」（バジェの批評家）は、ウルグアイに近い田舎町バジェの人々の生き様や出来事を、地元精神科医の眼を通してユーモラスに紹介するもので、発売から2日で完売、1995年に第100版出版を記録したベストセラーになった。また、本格的な小説では、「O Jardim do Diabo」（悪魔の庭）が有名。ジャーナリストとしては、地元のZero Horaの他、Estado de S.Paulo、Jornal do Brasilなど各地の主要紙や雑誌Vejaの論説委員やコラムニストを務め、また、TV-Globoのテレビ作家・脚本家としてヒット作を出すなど、幅広く活躍されてきた。

そんなベリッシモ氏との出会いは、在ポルトアレグレ総領事館の文化担当官として、国際交流基金文化人短期招聘計画での訪日招待を実現すべく、コンタクトしたことが契機であった。招聘計画は順調に承認され、1992年10月にルシア夫人とともに始めて日本を訪問された。私の学生時代の愛読書だった「Olhai os lírios do Campo」（野に咲く百合を見よ）の作者、エリコ・ベリッシモ氏の子息であることもあってか、訪日後、親しく接する機会が増えていた。そんな中、フェルナンド・ベリッシモ氏が同郷のイラスト画家のジョアキン・デ・ファオンセカ氏と共同で世界各地の魅力を紹介する旅行記Traçando シリーズで、日本を取り上げるという企画が浮上した。同シリーズでは、既に、ニューヨーク、パリ、ローマ、ポルトアレグレが刊行されていたところで、国際観光振興会

（現在の国際観光振興機構・JNTO）の協力を得て、同協会の招聘事業として、ベリッシモ氏は、フォンセカ氏とともに、1994年11月に二度目の訪日を実現した。

私は、その年の夏には帰国していたので、ベリッシモご夫妻がフォンセカ氏と日本を訪問された時には、本省でお会いしただけでなく、週末には自宅のある藤沢にお迎えし、コール首相も訪れた長谷の古民家・和食レストランでランチをした後、妻とともに古都鎌倉をご案内した。折悪しく、鎌倉大仏の爪に真っ赤なマニキュアが塗られるいたず

ら事件の直後で、ためらいもあったが、御夫妻を高徳院にお連れしたところ、日本でもこのような事件が起こることに少し驚かれた様子ではあったけれど、優しく微笑まれたことが印象に残る。一行は、東京都内だけではなく、広島、倉敷、神戸、京都、大阪、箱根等各地を巡り、浮世絵や相撲など日本の文化や人々の生活に触れられた。翌1995年、この旅行記「Traçando Japão」が、日本ブラジル修好100周年記念事業の一環として、上梓された。今回、この拙文を記すにあたって、読み直して、幾つか気づいた。スタンフォード大学で教鞭をとっていた父親の仕事の関係で、年少期の彼が1943～1945年のロス、サンフランシスコに住み、戦時中の日本人コミュニティと接点があったことを知った。また、私たちと訪れた鎌倉大仏マニキュア事件が、日常の出来事として淡々と取り上げられていたり、公式プログラムではなく御夫妻のイニシアチブで銀座や原宿に出かけ、若者の服装や七五三のお祝いなどに随所に新たな発見があったことなども紹介されていたり、本作品が、卓越した観察力とシニカルでユーモアにあふれた軽妙な文体で綴られた、素晴らしい日本紹介の書物であることを再確認させられた。

その後、2012年、私がベレン総領事の時に、パラ州政府行事での講演のためベレンを訪れたベリッシモご夫妻と偶然に再会を果たした。お二人は、いつも奥様が側におられる仲の良い御夫妻で、講演の合間に会議場脇のソファでお話しをすることで、偶然の再開を喜び合い、ポルトアレグレでの次回再会を約した次第である。御夫妻は、その後バリに向かわれたが、帰国後にバリではピナコテカ美術館で広重・ゴッホ展を楽しんだことや日本館に立ち寄ったことを伝える絵葉書を頂いた。翌2013年8月、ベレンからの帰朝直前に懐かしいポルトアレグレを訪ね、ベリッシモ御夫妻宅にご挨拶に伺った。私たち夫婦は、ご自宅で昼食に招かれ、ご子息夫妻、お嬢様、そして、代表的文化施設・サン・ペドロ劇場館長とともに、ベリッシモ氏ご自身の手料理を味わいながら、暖かく楽しい歓談の一時を過ごした。お嬢様は、当時、モザンビーク関係の仕事に付かれていたこともあって、その話題で盛り上がったことを今でも思い出す。

日本に戻ってからも、クリスマスカードのやり取りなどを続けていたが、コロナでブラジルへの郵便が不通になり、この2年間、残念ながら一時的に通信が途絶えている状況である。「Traçando Japão」の最後のページに、訪問中に拝むことができなかった晴天下の美しい富士山の全容を見るためにも、再度の訪日が必要と書かれている通り、ベリッシモご夫妻を今一度、日本にお迎えしたいと心から願っている。

VIVENDO

ブラジルに暮らして

Rolê ～流動的な、愛と笑いの集まり～

尾曾菜穂子
（ブラジル日本交流協会研修生）

私はサンパウロ州ピラール・ド・スールで日本語教師をしている。11ヶ月の期限のうち、もう4ヶ月が過ぎた。私にとって、ブラジルで暮らすことはかねてからの夢だった。

初めてのブラジルとの出会い。それはもう7年前のことになる。近所の学校に、ブラジルから何名か留学生が来ていた。私はその留学生たちが大好きで、ブラジルという国にも興味を持った。彼らは日本語しか話せない私をいつも遊びに誘ってくれた。そこにはいつも愛と笑いがあり、私はそんな時間が大好きだった。4年前、その留学生を頼って1ヶ月ほどブラジルに滞在した。

その時の居心地の良さから、今年の4月にまたブラジルへ来てしまった。今度の場所にはホストしてくれる友達家族はいない。いかにしてこの町の人々と出会うか…私は、友達と一緒にいったバーで2人のブラジル人と出会った。彼らと飲んで楽しく会話をした後、みんなで広場へと向かった。そこにはたくさんの方が集まっていた。友達の友達、さらにその友達…というように、その場の流れで誰かと出会う集まり輪になる。

ブラジルに暮らして感じたことは、愛と笑い、そして居場所

がある温かさだ。友達を作るのも、知らない誰かと一緒に時間を過ごすのも、そんなに難しいことじゃない。流れて出会う集まって、音楽をかけて歌って、踊って、たくさん話をして、アイデアを交換して、たくさん笑う。このような流動的な集まりを「Rolê」というそうだ。

Rolêに参加していると、ああ、ブラジルっていいな、と思う。思えば、最初に出会ったブラジル人も、4年前にお世話になったブラジル人も、今一緒にいる友達も、よくRolêを開催する。みんなを誘って集まり、ゆるく楽しく時間を過ごす。Rolêは、それまで私の知っていた「遊び」とは違った。日本で友達と遊ぶとき、オシャレして遠出して、お金と時間をかけていた。そして、「今日は〇〇ちゃんと遊ぶ」、というように、その日に遊ぶ相手は決まっていた。しかし、ブラジル人の、ブラジルでの遊びは、もっとゆるい感じだ。オシャレしなくても、近場でも、もっと気軽に友達と、誰かと会うことができる。途中参加も途中退出もあり。今自分がその素敵な輪の、渦の中、「Rolê」にすることが嬉しい。

ジャーナリストの旅路

“未知の世界”ブラジルとの出会い

木村隆介
（NHKサンパウロ支局長）

この7月、NHKのサンパウロ支局に赴任して1年が過ぎた。この1年あまりを振り返り、これほど自分の人生や考えに劇的な影響を与えた時間はほとんどなかった。赴任するまで、私はブラジルを含め中南米とは無縁の生活を送ってきた。当然ながら、ポルトガル語やスペイン語の能力はゼロ。当時の上司から次の異動先が「サンパウロ」と言われたとき、理解が追いつくまでの一瞬、頭が真っ白になったほどだ。

海外特派員としては2012年から2016年までの4年間、ドイツのベルリン支局に赴任した経験がある。日々多忙だったが、仕事は面白く、帰国後も海外勤務の希望を出し続けていた。ただ、まさかこのタイミングで、ブラジルに来ようとは、想像もしていなかった。

同僚からは「ブラジルはビザが下りるまで時間がかかるから、ゆっくり準備すればいい」とのアドバイスを受けていた。ただ、実際にビザは申請から1週間を下りた。東京・五反田にあるブラジルのビザセンターは、コロナの影響で、手続きに来ていた人は私以外にほぼ皆無。10以上ある窓口と広大な待合室から、普通なら人でごったがえすのだろう。数ヶ月から半年かかるとみていたビザは、意外にもあっけなく手に入った。

もう1つの課題だったのがワクチンの接種。当時ブラジルでは、コロナの死者が1日1000人を超えていた。ワクチンのキャ

ンセル待ちを受け付けている首都圏の病院にかたっぱしから電話をかけた。事情を説明し、なんとか出発までに2回の接種を終えることができた。

出国に手間取る同僚も多い中、発令から1か月ほどで日本を出発した。当時日本は、東京オリンピック直前のコロナ患者急増で、厳しい隔離措置がとられていた。一方のブラジルには、ほぼ何の障壁もなくスムーズに入国。その日から支局での仕事をスタートさせた。こんなに緩くて大丈夫だろうかと思ったが、その分、外での取材がやりやすいとプラスに考えるようにした。

サンパウロでの特派員生活は、毎日が刺激に満ちている。言葉や制度の問題から、日本やドイツに比べて、同じ物事に2倍、3倍の時間がかかることもある。一方、想像もしないところから突破口が開けたりもして面白い。治安と衛生面の不安はあるが、食文化が豊かで、人々には暖かく受け入れられてもらっていると感じる。

赴任前にニュースで見たブラジルは、深刻なコロナ感染や経済の混乱など、時期的にどうしてもネガティブな話題が多かった。これからはブラジルを紹介する立場として、日本の人々にポジティブなブラジルを知ってもらえるような存在になりたいと思う。

サンパウロ・ブックフェアにみる ブラジル出版業界の復活パワー

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

今年 2022 年 7 月 2 日(土)から 10 日(日)までの 9 日間、第 26 回サンパウロ国際書籍ビエンナーレが展示場 Expo Center Norte にて開催された。前回 2020 年はコロナ禍によりヴァーチャル開催となったため、今回は 2018 年から 4 年ぶりの対面式ブックフェアとなったが、事前の予想を大幅に上回る活況をみせた。このブラジルでは最大の「本の祭典」については、主要メディアや業界紙サイトが詳しく報道していたが、YouTube などでも面白い密着レポートがいくつも掲載されていたので、この辺の複数のライブ情報に目を通して見た。そこから見えて来た、ブラジル出版界の現状をフォローしてみたい。

サンパウロ・ブックフェアの歴史

サンパウロとリオで隔年ごとに書籍ビエンナーレを開催するようになったのは、1970 年からである。偶数年はサンパウロで、奇数年はリオで、という両都市交互開催スタイルが確定してから 50 年以上経過したので、今回は第 26 回となっている。

筆者が初めて入場した 1986 年の書籍ビエンナーレ会場は、イビラプエラ公園内のサンパウロ・ビエンナーレ（美術展）会場を使っていたが、その後サンパウロ市北部の大型展示スペース・アニエンビ（Parque Anhembi）での開催となって、世界でも有数のブックフェアとして定着していった。筆者が実際にしかけた 2008 年の第 20 回ビエンナーレは今でも記憶に残っているが、この時は、リーマンショックの直前で、ブラジル経済も出版業界も高度成長中の時期であり、熱気と活気のあるブックフェアになっていた。ベストセラーから学術書まで新刊本が山積み状態だったが、古本コーナーもいくつも設けられ、あちこちで新本や古本を何冊も抱きかかえた老若男女がレジ前で長い行列に並んでいた。このシーンは、1970 年代に東京の百貨店で頻繁に開催されていた大型古書展の雰囲気とそっくりで、本好きの熱気というのは、日本だろうがブラジルだろうが、全く変わらない、と実感したものだ。今回の第 26 回サンパウロ書籍展でも同様の熱気を YouTube 画面を通じて感じられたのである。



▲サンパウロ書籍ビエンナーレのシーン

第26回ブックフェアは大盛況

業界紙報道に基づき、今回の第 26 回書籍ビエンナーレの成果を数字で確認してみよう。①入場者数は 66 万人で前回 2018 年よりも 10% 増（ちなみに、12 歳未満も 60 歳以上も入場料は無料）②入場券購入方法は、会場で購入したのは全体の 10% で、90% がオンラインで事前購入、③総販売冊数は 300 万冊（入場者一人当たり平均 7 冊購入）、④出展社数 182 社、となっているが、いくつかの出版社別のトピックもメモしてみよう。

Global 出版社：販売部数では前回（2018 年）比で 100% 以上増加、なかでも人類学者ダルシー・リベイロ（1922-1997）の主著『ブラジル国民』の特別記念版が一番売れた由で、二番目は、これまた古典といえる社会人類学者ジルベルト・フレイレ（1900-1987）の『大邸宅と奴隷小屋』であった。

Globo 出版社：一番売れたのが、高見広春『バトル・ロワイアル』のポルトガル語翻訳本、二番目が現在ベストセラーとなっているラウレンチーノ・ゴメスの歴史ノンフィクション『奴隷制 第 3 巻』で、全体の販売部数は前回（2018 年）比で 4 倍増であった。

Record 出版社については、前回（2018 年）比、3 倍増、Submarino 書店の場合は、前回比で 330% 増、Loyola 出版に関しては、延べ 3 千冊が売れたが、これは前回比 30% 増、Rocco 出版社については、同社の目玉商品であるハリーポッター関連本の売行き好調で、前回比 185% 増、というように、各社とも予想以上の売行きに嬉しい悲鳴を上げていた。

特別招待国ポルトガル

今年 2022 年はブラジルがポルトガルから独立して 200 周年ということで、今回の書籍ビエンナーレではかつての宗主国ポルトガルが特別招待国として大きな展示スペースが設けられていた。なかでも人気作家ヴァルテル・ウーゴ・マンイ（Valter Hugo Mãe）の最新作『ブラジルの病氣』の発刊イベントが本人も参加して行われ、大いに注目を集めた。アンゴラ生まれのヴァルテルが、ブラジル史を題材にとって、ポルトガル人が先住民インディオに対して抑圧的に植民化したファクトを小説化したものだが、彼の長編小説としては 8 作目だ。この件では、総合週刊誌 VEJA(2022 年 7 月 13 日号)も、見開き 2 頁の特集記事でヴァルテルを大きく取り上げていた。

4 年ぶりのブックフェアにまつわるエピソードをいくつかメモしてみたが、複数の大手書店や出版社が経営危機に陥った（民事再生を申請した）2018 年から 4 年経過したこともあり、ブラジルの出版業界は息を吹き返したといえるだろう。ブラジルの活字文化ポテンシャルは、やはり侮れないパワーを有しているのだ、と筆者は再認識した次第である。



▲ポルトガル人作家ヴァルテル・ウーゴ・マンイ

●大統領自ら「不正選挙」偽情報を拡散

ボルソナーロ大統領は 7 月 18 日、ブラジリアに駐在している各国大使を大統領官邸に招き、伯の電子投票システムの脆弱性を指摘し、2018 年にハッカーが選挙高等裁判所（TSE）のコンピューターシステムに侵入したとされる件を理由に「2018 年の選挙は不正選挙であり、2020 年の地方選挙は実施されるべきではなかった」と主張したが、証拠は提示しなかった。また、ボルソナーロは、選挙高等裁判所（TSE）と連邦最高裁判所（STF）を批判した。尚、連邦警察と連邦検察庁の調査では、2018 年のハッキング未遂により、電子投票システムのセキュリティが破られた痕跡は見つからなかった。ボルソナーロは他にも「TSE 自身、2018 年の票数が操作されたことを認めている」、「票の集計は（TSE ではなく）外部委託された民間企業が行っている」等の偽情報を連発した。これに対し、ファキン選挙高等裁判所（TSE）長官は「電子投票システムに対して不正が行われた形跡は一切ない。選挙裁判所が本年の選挙を公正且つ透明な形で実施するための準備はできている。ある重要人物（ボルソナーロ）による選挙否定論は受け入れ難いものである。証拠もないのに特定の国家機関（TSE）が不正を働いていると告発するのは極めて深刻なことである。彼らは世論を囚われの身にしようとしている。偽情報

と専制的なポピュリズムに対して『もう、たくさんだ』と言う時に来ている」とボルソナーロを名指しすることなく批判した。パシエコ上院議長、ルーラ、シロ・ゴメス、テベチ等の大統領候補もボルソナーロを批判した。尚、オ・グローボ紙によると、アルゼンチン、チリ、中国、英国の大使は会合に招かれず、米国大使は空席のため、臨時代理大使が出席した。（7 月 19 日付コレイオ・ブラジリエンセ）

尚、18 日の会合の出席者で、フォーリャ・デ・サンパウロ紙の取材に応じた複数の大使は、「ボルソナーロの選挙に関するプレゼンテーションは、注意を逸らす、または開票結果に疑義を呈するための準備を目的とした、トランプ流の戦略である」と見ている。また、今回の会合が SNS 上で生中継されたことから、「外交団よりも、過激なボルソナーロ支持層を繋ぎ止めるためのイベントに過ぎない」との意見もあった。更に、パワーポイントの資料にボルソナーロ大統領の写真が随所に使われていたり、英語の綴りの間違い等、初歩的なミスが目立つ等、全体として素人の仕事と評された。但し、ボルソナーロの主張には確固たる根拠があり、伯の電子投票システムに対する疑問が深まったと述べた出席者が一定数いたことは事実である。（7 月 19 日付フォーリャ・デ・サンパウロ）

キャンパス・コラム

情味溢れる情熱の地、ブラジル

橋元慈英
（上智大学 4 年）

先日、一年半ぶりにブラジルに戻る機会があった。幼少期と小学校から高校までの 10 年間をブラジルで過ごし、大学に入学するタイミングで日本に帰国した。以来、今回は 2 度目の訪伯である。日本の生活でともすれば忘れていた光景に出くわし、ここがブラジルだと。その中で、いくつか感じた事がある。

1 つ目は、ブラジルでは日常の光景ではあるが、車に乗っていた際、飴やガムを売りに来る年端もいかぬ子供達が見えた。学校にも行けずにその日を生きる為に、街角に立つ。現在の日本でそのような光景を見る事は無い。物乞いをする子供達と同じ年齢の子供達は、当たり前前に学校で勉強でき、当たり前にご飯を食べる事が出来る環境にいる。無論、日本にも貧富の差は存在するが、日常の中で、「貧困」を直接感じる事があまりない。ブラジルに住んでいた時は、「貧困」は身近にあるものであったが、この「貧困」という問題に対して考える事が減っていた。恵まれしものである自分の、立ち位置を改めて考えるきっかけとなった。

2 つ目は、海外、それも新興国で過ごしたからこそ分かる、日本のインフラの凄さである。私が住んでいたサンパウロは大都市であるが、停電は珍しい事でなく、懐中電灯

を頼りに食事をする事や、学校の宿題をせざるを得ない事もあった。雨が降れば信号機が壊れ、道路が冠水し陥没することも日常茶飯事で、いつまで経っても街中の穴の数は一向に減らない。

3 つ目は、時間感覚についてである。日本で地下鉄を利用する際、時間通りに運行される事は当たり前である。イベントなどにおいても、ぴったりと決められた時間に始まり、決められた時間に終わる。私も時間を気にし、気付いたら焦っていることが増えた。ブラジルでは時間通りに来る事が逆に珍しく、人々も多少遅れる事を気にしない。全てがブラジルのリズム、時の流れがゆっくりであり、「時間」というものに追われている人々も少ない。勿論、時間通りに物事を進めることは大切な事であり、望ましい事である。しかし、日本ほど厳密に時間を気にしない彼らのおおらかさや生き方は、どこか懐かしく、羨ましいとも感じた。

今回ブラジルに戻り、日本とブラジル、両国の違いを改めて実感した。今は日本の便利さ、快適さを享受しているが、また直ぐに、少しばかり不便だが情味溢れるブラジルに戻りたいと思っている自分がある。ブラジルは、そんな不思議な魅力に包まれている。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『一冊でわかるブラジル史』

(関眞興 著)

「一冊でわかる〇〇史」シリーズでアメリカ史、ドイツ史、ロシア史などを担当してきた歴史著述家によるブラジル史。世界史との関連性の視点からブラジルの政治と経済の大きな流れを植民地期、帝政期、第一共和政、ヴァルガス政権、軍政期と時系列にわかりやすく叙述している。例えば1817年革命やカヌードス戦争についても略述されており、ブラジル史の概要をつかむには便利な一冊。但し、一部の人名地名に誤記があることは残念。

(河出書房新社 2022年4月 212頁 1,700円+税)

『移民の衣食住』

(河原典史・大原関一浩 編著)

立命館大学国際言語文化研究所が主宰した興味深い共同研究書。「醤油と日本人移民(北米)」、「戦時下の食を

じた支配と抵抗」、「戦時下のアメリカ抑留所における食事」などの章では、北米移民の食生活の諸側面を掘り下げている。第2部では、戦後の日系アメリカ人の食文化の変遷をフォローしているが、二つのコラム「トメアスー移住地の食文化と俳句」「日系移民短歌にみる食文化」がブラジル移民たちの食文化を短詩から読み解いている。

(文理閣 2022年3月 278頁 3,000円+税)

『日本からみた世界の食文化』

(鈴木志保子 編著)

副題が「食の多様性を受け入れる」となっている本書は、栄養学の専門家が書いた食文化に関する百科全書的エッセイ集だ。第1章で、日本の食文化、第2章で、世界の食文化、第3章で、思想・宗教、これからの食事・食生活、と三部構成で多様な食文化の情報が具体的に織り込まれており、ブラジル食についても、フェイジョン(インゲン豆)、フェイジョアーダ、タピオカ粉、カンジャ(鶏肉雑炊)等々、バランスのとれた記述となっている。

(第一出版 2021年11月 302頁 税込み3,850円)

『新社会学研究』2021年第6号

「旅する人生の社会学」特集号に収録

された論文「ブラジル出身のデカセギ日系移民による旅行記と“旅”の意味づけ」は、アンジェロ・イシ教授によるデカセギ移民移動における日伯間の距離と心理的壁についての社会学的考察である。一人の在日ブラジル人による世界冒険旅行をケーススタディしたうえで、“彼ら”の旅の意味を考察した教授の結語は「コロナ危機後の在日ブラジル人のトランスナショナルな移動がどう変化するか、注視したい」。

(新曜社 2021年12月 266頁 2,100円+税)

『「トルコ人」たちの百五十年』

(飯島みどり編著)

トルコ共和国の住民ではなくレバノン・シリア系中南米人を対象とする科学研究費共同研究の成果の一部と短編小説邦訳を合体し一冊にした本。副題は「中東とラテンアメリカを結ぶ」。グアテマラの作家エドゥアルド・ハルフォンとのインタビューを読めば、彼の出自の複雑さ(祖父母の3人はアラブ出自、母方祖父はユダヤ系、母はアシュケナジ系、父はセファルディ系)に驚嘆しつつラテンアメリカと中東との交流史を学習することになる。

(影書房 2021年12月 196頁 2,200円+税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

独立200周年—パラ—事情

パラ州ベレンに勤務していた時、毎年8月15日になるとテレビや新聞が「Dia da Adesão do Pará à Independência do Brasil (パラがブラジル独立に加わった日)」なる特集を組み、1823年8月15日をもってパラ(当時は、グラン・パラ県(Província do Grão-Pará))がブラジルの独立に加わった記念すべき日であるとして大きく報道していた。

報道の内容は、概ね、「独立宣言当時のパラは、他のブラジルの地方に比べて、ポルトガル人エリート層(主に商人)がポルトガル本国とより強い政治的・経済的絆で結ばれていた。エリート層の独立に対する抵抗が強く、独立の承認が遅れた。独立宣言後約1年たった1823年8月に至り、『パラが独立に同意しない場合、ペドロ皇帝に雇われたイギリス人提督コ克蘭の艦隊がベレンを攻撃する』との情報(実はハッターリだったとの見方もある)をもたらした帆船マラニオン号(艦長は、コ克蘭の部下グレンフェル)の来訪をきっかけにより早く独立の承認に至った。」というものであった。

一般にブラジルの独立は、1822年9月7日ということになっているが、これは、ペドロ王子がイピランガの丘で有名な「独立の叫び」を行った日だ。歴史学者のボリス・ファウストが書いているように、「独立は、数年間で確定(A consolidação da Independência se deu em poucos anos)したが、それは、比較的激しい、いくつかの軍事的衝突無しに達成されたわけで

はなかった」。衝突は、ブラジル全土で起きたが、良く知られているのは、バイーアにおける独立戦争だ。独立宣言後も地元商人らによる市民軍とポルトガル軍の間に激しい衝突が繰り返された結果、ついに1823年7月2日に市民軍が勝利したが、バイーア州では、7月2日が独立記念日として盛大に祝われている。

パラ州では、1996年の法律に基づき、独立承認文書の公布が行われた8月15日を、州にとって最も重要な(Data Magna)祝日と定めている。この日を偲び、その歴史を振り返るための催し等を開催し、州民に対する啓蒙を行うことが定められている。独立承認文書の公布の日の光景を描いた巨大な絵画が、州議会主玄関を入った広間の壁一面に掲げられている(画像参照)。

ベレンでこの日を迎えた際、特に町が盛り上がっているわけでもなく、Adesãoという言葉にも違和感を感じたので、この日がどういう日なのか周りの人に聞いてみたが、人々の答えは、なんだか歯切れが悪いものだった記憶がある。今回、地元でジャーナリストをしている日系の友人に改めて聞いてみたが、「自分も実はよくわかっていない。」という答えだった。バイーアでのカーニバルかと思えう7月2日の大騒ぎについての報道に接するたび、パラの静かなAdesão記念日を思い出す。(MK)

▼1971年、Anita Panzuti 作、画面左側に、独立文書公布式典、真ん中に、当時の政府庁舎(Palácio Lauro Sodré)、右側に帆船マラニオン号



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア) 運営:株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716

お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

日系ブラジル人採用 ~40年以上の実績~

人材で拓く未来のイノベーション

製造請負・製造派遣・技術事業・
人材紹介／紹介予定派遣
業務委託(管理代行)・特定技能登録支援機関
留学生支援サービス



AVANCE CORPORATION

株式会社アバンセコーポレーション
〒450-0003
愛知県名古屋市中村区名駅南1丁目11-12
名駅Minami-Oneビル
<https://www.avance-corp.com>

東京オフィス
東京都新宿区西新宿3-2-11新宿三井ビルディング二号館
TEL: (03) 3286-8686 FAX: (03) 5322-2311



日本ブラジル中央協会

法人・個人・学生 新規会員募集中

会 員 数 法人会員 105 社 個人会員 約 400 名 (2022年8月現在)

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」
にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会 員 特 典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布。
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に参加できます。(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます。
4. 会員宛にメールでお伝えする、様々なブラジル情報をご覧頂けます。
5. ホームページにて、会員限定情報をご覧頂けます。

年 会 費

※入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

お 申 し 込 み



《日本ブラジル中央協会公式HP》

<https://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検 索

秋期ポルトガル語講座のご案内

受講生募集中!

当協会では、“楽しく学ぼう! 学んで話せるポルトガル語!” をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。

秋期ポルトガル語講座は、
2022年9月6日開講 12月初旬まで。

コースのご案内

- ◆全くの初心者コース【火曜 16:30 〜】
- ◆初心者コース【火曜 19:00 〜】
- ◆初級 I コース【金曜 19:00 〜】
- ◆初級 II コース【水曜 19:00 〜】
- ◆中級コース【月曜 19:00 〜】
- ◆上級コース【木曜 16:30 〜】

締切間近 ◆上級コース【木曜 19:00 〜】

※詳細は、HP を参照下さい。
<https://nipo-brasil.org/portugal/>

イベントのご案内

ブラジル駐在家族 赴任前ガイダンスセミナー

日 時：2022 年 9 月 17 日 (土) 9:30 〜 12:00
開催方式：ZOOM オンライン
講 師：伊藤 智晴 (元丸紅駐在員夫人)
山口 セシリア (在サンパウロ、長年サンパウロで日本企業に勤務) 他
参加費：会員所属企業の駐在員の配偶者 2,000 円 非会員 3,000 円
(夫婦で参加の場合は、+1,000 円)

長谷川 勝彦 日東珈琲 (株) 社長 ランチョン・ミーティング

演 題：日本のコーヒー史にその名を残す老舗「銀座カフェパウルスタ」

日 時：2022 年 9 月 16 日 (金) 12:00〜14:00
場 所：シーボニア・メンズクラブ (会場変更の可能性があります)
参加費：会 員 2,700 円、非会員 3,500 円

「銀ブラ」という言葉は、銀座をブラブラするということではなく、銀座のカフェ・パウルスタでブラジルコーヒーを飲むことであるというのは、ブラジル好きの人の間では良く知られた話ですが、正確には、慶応大学のキャンパスから銀座のカフェパウルスタまで歩き、ブラジルコーヒーを飲みながら会話を楽しむことであったとか。そのカフェパウルスタの6代目社長である長谷川社長をお招きして、カフェパウルスタの歴史、逸話等を自由に語っていただきます。

エミレーツ航空が、 南米を近くする。

リオデジャネイロ*
サンパウロ

ブエノスアイレス

FLY BETTER

エミレーツ航空は、サンパウロ、リオデジャネイロ*、南米のブエノスアイレスを含む全世界150以上の都市に就航。
シームレスな乗り継ぎで、よりスムーズで快適なビジネストラベルをお楽しみください。

ワンランク上の空の旅へ。エミレーツ・ビジネス

Emirates

*リオデジャネイロへのフライトは、2022年11月2日より運行開始。

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

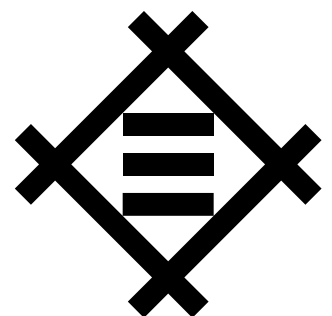
貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、
増産や品質向上に貢献。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.